

から興隆しているライブ・エンターテインメント市場に期待が寄せられるようになった。しかし、東日本大震災は「ライブの可能性への期待」に限界があることを露呈した。震災そのものによる直接的な影響に加え、相次ぐ余震、「世間」を意識した自粛ムード、そして原発事故による電力不足といった副次的な影響は、コンサートやイベントなどの中止や延期を余儀なくさせたのだ。

資本主義経済のなかで機能している文化産業は、東日本大震災による経済的な打撃を受けた。経済活動を継続させるために、文化産業はチャリティの名のもとで、経済的損失の回復を試みようとした。チャリティによる被災者や被災地への支援は、もちろん好ましい社会的貢献として評価される。しかし、ここで問題になるのは、欧米と比べて、チャリティという概念が日本では定着していないことだ。音楽産業がチャリティ

を掲げた取り組みを実践することには、胡散臭さが見え隠れしてしまう。支援のためのチャリティが、文化産業自身のためチャリティへとすり替えられる恐れがあるのだ。ポピュラー音楽には当然、チャリティとは別の可能性も含まれている。たとえば、政治性を孕んだ脱原発や反核というメッセージは、一九七〇年代後半以降から国内外を問わず数多く届けられている。今回の原発事故では、音楽産業の枠組みのなかで活動する有名ミュージシャンが、YouTubeというオルタナティブなメディアをとおして批判的なメッセージを送り話題となった。しかし、政治性を排除してきた日

本の文化産業——とくに音楽産業——では、政治性を孕んだメッセージは可視化されることがないのだ。東日本大震災は、人びとが生きるために必ずしも必要とされていないポピュラー文化の存在意義を問い直す契機となった。穏やかな日常では意識することのないポピュラー文化の自明性に、さまざま

まな課題が提起されたのだ。時間の経過とともに、穏やかな日常は取り戻されるだろう。しかし、ポピュラー文化の脆弱さが明らかになった今、パラダイムシフトが求められているのかもしれない。

今春以降、「シーベルト」を始め、これまで馴染みのなかつた単位をよく聞くようになった。LED電球の明るさを示す「ルーメン」もその一つだ。これまで電球の明るさを示す単位は「ワット」だったが、これは仕事量や電力を表すものであり、LE

D電球をワットで表すと5Wや6W程度になってしまうそうだ。これまでは「消費電力の多さ」がLED電球の明るさ」と信じられてきたが、LED電球の登場でこれは過去のものとなくなった。これによりたとえば四五〇ルーメンとはどのくらいの明るさか、新たに各人が体験してみなければならなくなった。

翻ってみて、「余暇」を表す単位とはあるのだろうか。例を挙げれば「休日日数」「非労働時間」「消費金額」などが代表的な指数だ。どちらかといえばこれまでの労働者はこれらの数字が増大することを余暇の充実と捉えてきたようだが、時間や消費の増加と余暇の充実がイコールではないはずだ。いったい余暇の充実度を測る単位とはなんだろうか。「今年は何〇〇ヨカだったから、来年は何〇〇ヨカが目標だ」、そんな単位はあるのだろうか。

(山田)

# 日本余暇学会ニュース

発行所 日本余暇学会 発行人 藪田碩哉 発行日 平成二十三年八月一日

## 第15回研究大会

十月九日(日)に

実践女子短期大学(東京・日野)

## テーマ「余暇と新しい公共」で開催

十五回の節目を迎えた研究大会は十月九日(日)に東京都日野市の実践女子短大でツリズム学会との共催のもとに開かれる。大会のポイントは次の四点に整理することができるだろう。

### ①テーマは「余暇と新しい公共」

大震災を機に「公共」なるものへの問い直しが改めて提起されている。今回は市民の側から参画する「新しい公共」を俎上に上げ、余暇との関わりを追求す

る。余暇は人々の自由な活動の基盤であり、人と人の新たなつながりを育む母体となる。余暇と言えは「個人的なもの」という閉じた発想が強い中で、余暇の持つ社会性や公共性の側面に光を当て、余暇研究の新たな領野を開拓するというのが今回のねらいである。この方向に添った研究発表が多数登場することを期待したい。

### ②基調講演は「つながり」をキーワードに

大会テーマに関する講演は天野正子氏(東京家政学院大学学長)をお願いすることになった。演題は「これまでのつながり、これからのつながり」である。天野氏はサークル運動やフェミニズムの研究者として知られ、『生活者

大会テーマに関する講演は天野正子氏(東京家政学院大学学長)をお願いすることになった。演題は「これまでのつながり、これからのつながり」である。天野氏はサークル運動やフェミニズムの研究者として知られ、『生活者

基調講演は  
**天野正子氏**  
(東京家政学院大学学長)  
テーマ  
「これまでのつながり、これからのつながり」

## 第75号

日本余暇学会事務局  
〒191-0016  
日野市神明1-13-1  
実践女子短期大学  
生活福祉学科藪田研究室  
Tel/FAX 042-584-5428  
e-mail  
info@yokagakkai.jp  
Home Page  
http://www.yokagakkai.jp/  
編集人:山田貴史

### ④学会の新たな方向を見定める

前号のニュースでも紹介されているように、現在、日本余暇学会の今後の方向として「ツリズム学会」等の他学会との連携・統合の検討が行われている。総会では、会員のアンケート結果を踏まえて、具体的な提案が行われ、討議に付されることになった。

### ③ワールド・カフェで討論会

研究発表や講演の後には懇親会というのが常識だが、今回は会員の自由な意見交換と懇親を兼ね備えた「ワールド・カフェ」方式のミーティングが最後のプログラムとして予定されている。ワールド・カフェは少人数でのラウ

会費納入のお願い  
平成20年度～平成23年度の会費未納の方に請求書を同封しています。  
口座番号:00140-9-729065  
加入者名:日本余暇学会  
会費:一般会員10,000円  
学生会員5,000円  
\*余暇に関心のある方に、入会をお勧めください。

### 新入会員のお知らせ

飯嶋 好彦  
(東洋大学 国際地域学部国際観光学科)  
李 承吉  
(Nanseoul大学 観光経営学科)





までの定点観測マ... ケットに入っていな... い、すなわちマーケッ... トとして捉えきれて... いない新たな需要に... どう対応していくか... という構造化問題が... ある。

そうした中で観光... 再生にむけて、どの... ようにパラダイムシ... フトしていくことが... 重要であろうか。今... 回の電力不足による... 休業や休暇シフトを... 機に、今まで怠って... きた制度として長期... 休暇を整えていくこ... と、長期滞在を可能

とすするインフラを... 備すること、旅の社... 会性や滞在の魅力... 高めるプログラムを... 開発することによっ... て、新たなバカンス... 文化を創造してい... べきだろう。

立図書館の司書が... け、被災地住民へ... 「レファレンス」サ... ビスをすることを実... 現した。地域社会... 課題解決の「場」と... しての機能を情報... 通信ユニケーショ... ン技術が従来型の... のを補完する方向... が見えた。

雑誌「社会教育」... では、一九九五年... の阪神大震災をう... け、一九九七年十... 月号で「生活安全... ライフパニック学... 習」を特集した。... ここでは、「いのち... の生涯学習」を教... 育社会学者の渡... 辺博史が提唱した... 人生において、誰... も被災などで「パ... ニック」になる場... 面に遭遇する。そ... の時にどう素早く... 対処できるかを日... 頃から学習してい... こうという考え... 方である。天災は... 人々に自分の頭で... 考えることを気づ... かせてくれた。... その後、雑誌「社

ていた携帯電話が... 地震のときには全... 機能しないという... と、②ガソリンス... タンドやコンビニ... は、燃料や食糧備... 蓄基地ではなく、... 流通という中... にあつては、い... う機能しうるも... のであること、③... ペットを探して... いる間に津波に... 巻き込まれた... 人にもおり、... ペットは家族... であつたこと... を再認識した... こと、④プ... ライバシーのな... い避難所とそれ... を避けるための... 車中生活のい... ずれもストレ... スであること、... ⑤経済力の差... によって仮設... 住宅か避難所... 生活かという... 格差が生まれ... ることが明らか... になつた。

### 近藤真司 『社会教育』誌編集長

### 宮城の地で震災を体験した社会学者の立場から考察する

今回の震災では、... 大きな揺れを経験... したものの幸い... 被害は少なく、... そういう意味... では被災者とい... うよりは体験者... だ。

また社会レベル... では、①ライ... フラインの停止... は都市的生活... 様式の停止を... 意味すること... 、②再び地震... や津波が発生... するという流... 言によって不... 安が広がって... いること、

と、③余震の... ストレス④少... 子高齢化が進... むなかでの持... ち家制度の再考... ⑤強盗やレイ... プが頻発して... いることなど... がわかつた。... 復興策はまだ... 何も決まってい... ない。復興に... 関する情報は... 東京から発信... され、ま、街... づくりのメン... バーは東京か... ら派遣され、... 地元研究者は... 無視されてい... る。「東京発... 」を変えてい... かなければ、... 復興の促進は... 難しいと考... える。

このシンポジウム... では、三・一一... 以後の社会と... 人間の考察を... 踏まえて、これ... からの余暇学... び、観光学の... 方向を模索し... 、新しい社会... づくりの方向... 性のきっかけ... を考えたい。

「社会教育」二〇〇四年... 一月号で「防... 災楽習ハンド... ブック」を特... 集した。その... 特集のキーワ... ードは「自助... ・共助・公助... 」であつた。... 押しつけて... はない「楽習... 」という学... びを提唱した... が、七年経... つと忘れてい... ることも多い... 。三・一一... 震災後の二〇... 一一年六月... から新たな... メンバーで... 中央教育審... 議会生涯学... 習分科会... は、「個人の... 自立と絆づくり... 」を政策の... 中心にす... えた。それ... をどうや... って実現す... るのか。... そこには「... 社会」「ソ... ーシャル」と... いう概念と... 地域をさ... さえる「コ... ミュニティ... 」とをつな... ぐていくこ... とが必要... である。... そのために... は、学校... 教育の教... 員に並立... する、地... 域教育を... 担う地域... にさまざま... な専門... 家が必... 要とな... る。地... 域の人... と人を... つない... でいく「... 仲介」

この専門... 家である。... これは、... 日本余暇... 学会の初... 代会長... の岡本... 包治が... 一九七... 五年一... 二月号... の雑誌... 「社会... 教育」... の「成... 人の余... 暇と学... 習」と... いう論... 文で「... 余暇は... 地域社... 会をつ... くる」と... して「... 余暇は... 社会の... 中で生... かされ... てこそ... 」と「... 個人が... 社会に... 役割を... 演ずる... こと」... によっ... て、地... 域社会... づくり... に不可... 欠なも... のとな... る。「... 成人に... 対して... 社会教... 育とい... う立... 場から... 指導す... るプロ... フェッ... ショナ... ル」が... 必要に... なると... 余暇... 時代を... 予言し... ている... ことと... 重なっ... ている... のでは... ないか... 。

復興策は... まだ何も... 決まっ... ていない... 。復興... に関す... る情報... は東京... から発... 信され... 、ま、... 街づく... りのメ... ンバー... は東京... から派... 遣され... 、地元... 研究者... は無視... されて... いる。「... 東京発... 」を変... えてい... かなけ... ば、興... 隆の促... 進は難... しいと... 考える... 。

観光は、国内観光... にも何を... たらす... のか、... 広い視... 点から... 考察す... る。震... 災後求... められ... るパラ... ダイム... シフト... と我々は... 何をし... なければ... ならない... のかとい... う問題... について... 考えて... みたい... 。

去る七月一日、第二... 回目となる観光・... 余暇関連共同... 大会が東洋大... 学で開催され... た。そのなか... で、日本余暇... 学会は、「三・... 一一以後の余... 暇と観光と文... 化」と題して... 緊急シンポジ... ウムを開いた... 。コーディネ... ーターは、... 日本観光振興... 協会の丁野朗... 氏が登壇した... 。シンポジウ... ムに先立ち、... 大船渡の観光... 大使を務める... 澤内会員より... 、大船渡の震... 災時の様子が... ビデオで紹介... された。以下... にそれぞれの... 立場からの発... 言趣旨を紹... 介する。

ドよりもソフトを... 競争よりも共生... を志すべき時で... はないのか。... その文脈の中... で余暇は新し... い意味を帯び... 、観光も発想... の転換を迫ら... れ、暮らしと... 文化のあり方... もコペルニク... ス的転換を遂... げることが求... められている... 。このシンポ... ジウムでは、... 三・一一以後... の社会と人間... の考察を踏ま... えて、これか... らの余暇学、... 観光学の方向... を模索し、新... しい社会づく... りの方向性の... きっかけを考... えたい。

### 緊急シンポジウム 「3.11以後の余暇と観光そして文化」 報告

また社会レベ... ルでは、①ラ... イフラインの... 停止は都市... 生活様式の停... 止を意味す... ること、②再... び地震や津... 波が発生す... るという流... 言によって不... 安が広がって... いること、

復興策は... まだ何も... 決まっ... ていない... 。復興... に関す... る情報... は東京... から発... 信され... 、ま、... 街づく... りのメ... ンバー... は東京... から派... 遣され... 、地元... 研究者... は無視... されて... いる。「... 東京発... 」を変... えてい... かなけ... ば、興... 隆の促... 進は難... しいと... 考える... 。

観光を取り巻く... 環境変化とし... ては、①福... 島原発事故... による影響... の長期化、... 今夏の海水浴... などへの影... 響②電力不... 足と電力不... 足の長期化... による休業... や雇用の不... 安定③余暇... や観光に... 対する意識... の変化、自... 粛や先行き... 不安による... 貯蓄志向の... 強まりなど... が挙げられ... る。今後の... 余暇や観光... を考える時... 、①若年... 層の人口... 減少などに... より既存の... 国内マー... ケットの... 規模が減... 少していく... こと、②今

第61回 日本余暇学会理事会  
日時：2011年7月8日（金）18:00-20:00  
場所：桜美林大学四谷キャンパス  
出席者：藪田、辰巳、下島、徳江、宮入  
1. ツーリズム学会との連携あるいは統合について  
2. 研究大会について  
3. 研究会について  
4. ニュースレターについて

宮入恭平  
（東京経済大）  
「社会」の概念と地... 域をささえる「コ... ミュニティ... 」とをつな... ぐていくこ... とが必要... である。... そのために... は、学校... 教育の教... 員に並立... する、地... 域教育を... 担う地域... にさまざま... な専門... 家が必... 要とな... る。地... 域の人... と人を... つない... でいく「... 仲介」

東日本大震災は、... 日本の社会や... 経済に大きな... 影響をもたら... した。その影... 響は、ちろ... ん、ポピュ... ラー文化にも... 及んでいる... 。文化にも及... び、文化産... 業という枠... 組みのなか... で機能してい... るポピュ... ラー文化に... は、有事... の際にどの... ような存... 在意義があ... るのだから... か？音楽産... 業では、一... 九八〇年代... 末から低... 迷が続く... CD市場に... 代わり、... ゼロ年代... 半ば